

## 2014年度 学校評価自己評価・2015年度学校関係者評価

### 2014年度 学校評価自己評価

#### 1. めざす学校像

<p><b>大阪女学院の建学の精神</b>                  (ミッションステートメント／2009年9月15日制定)</p> <p>大阪女学院は                  創造主を畏れ キリストの教えに従って                  一人ひとりを愛し                  何が重要であるかを見抜く力を養い                  喜びをもって 進んで社会に仕える人を育む</p>	<p><b>大阪女学院が育もうとする学生・生徒像</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>*キリスト教に基づく愛と奉仕を実践する人</li> <li>*自由な学びの中から、物事の本質を見つめ、自己の進路を選ぶことのできる人</li> <li>*英語力を基礎に幅広い教養と公正な判断力を身に付け、自律的・主体的に行動できる人</li> <li>*性別の役割にとらわれずあらゆる可能性に挑戦し、女性の尊厳の確立に努め、リーダーシップを発揮する人</li> <li>*社会の課題に関心を持ち、世界、日本、地域のために仕える人</li> </ul>
--	---

#### 2. 中期的目標

##### 運営基本方針 (2014～2019年度／Ⅰ期及びⅡ期中期計画において)

グローバル化の進展に伴う市場原理による競争主義の台頭により、我が国においては、経済をはじめとして社会のあらゆる分野における既存のシステムの変革が迫られている。さらに、「知識基盤社会」における「知」は容易に国境を越えるものであることから、グローバル化は教育と密接な関わりを持つことは論を待たない。大阪女学院は、このような環境変化に的確に対応するとともに、130年間にわたり育んできた精神を堅持し、2014年度から2019年度において、次の方針によって、健全な運営を創出する。

- \*教職員の知恵と力を結集して、歴史と伝統に証される良き学校運営を継承する。
- \*これまで育んできた学生・生徒像、人格を育む教育力、積み上げてきた教育・研究活動の成果を広く社会にアピールし、学生・生徒の安定的な確保に力を注ぐ。
- \*本学の建学の精神を実現するために変化しなければならないことについては、強い決意をもって迅速な対応を行う。

#### Ⅰ. 建学の精神と教育理念の実践

##### 1. キリスト教に基づく人間理解の深化

大阪女学院中学校・高等学校は女性が一人の人格として、何らかの方法で働く義務を悟り、正直に仕事をするを誇りとし、日常生活の雑事を越えて、物事を見抜く力をもつ人間を育むことを目指す。宗教教育については、長年の実績を踏まえた上で、キリスト教に基づく人間理解を深め、一人ひとりがかけがえのない存在であることの自覚を促し、生徒自らの生き方と他者とのかかわり方を学ばせる。また、入学後、保護者に対しても、学校への理解を深めてもらえるよう努める。

##### 2. 建学の精神の再認識と再構築

本校が女子校として建学されたことの中にある精神を再認識し、教育理念を確認しつつ、現代に生きる女子のための教育の充実に努める。

#### Ⅱ. 教育の内容と学習支援の充実

##### 1. 学力向上の取り組み

- ・生涯学習し、成長を続けていく「真の学力」ー学力、協調性、人権意識、規範意識、国際性の習得
- ・自学自習できる主体性と学力を身につけるための自己管理能力の養成

##### 2. 授業内容の充実のための取り組み

- ・2週間時間割による授業時間の確保と、行事の精選
- ・分割授業、習熟度別クラス編成の授業形態の改善
- ・本校にとって有効なタブレット等の活用、設備に必要なインフラ整備を含めての研究

##### 3. 生徒の人権意識を深める取り組み、生徒の心身の健康と安全を守るための生活指導と生徒支援

- ・日常生活の実際の場面での身近な人権侵害(不当な力関係やいじめ)に切り込む人権教育
- ・特定の生徒への支援教育のスキル向上を、すべての生徒の支援に結びつけるための全教職員の意識向上

##### 4. 生徒の生活全般に対する指導

- ・人間関係を構築する力の育成ー ルールの遵守・マナー、礼儀の尊重・コミュニケーションによる他者理解

##### 5. 国際理解教育の推進

- ・留学や留学生との交流を通じ、言語への関心を深め、言語や文化の違いを知ることで、世界に目を向け、広い視野をもって物事を考える生徒を育てる。

##### 6. 英語科の充実

- ・時代の求める英語科への改革、成果の数値を掲げた目標の可視化

#### Ⅲ. 教育の実施体制の改善

##### 1. 中学・高校としての図書館機能の充実と教員との連携

- ・蔵書の充実ー新指導要領を踏まえた教員向け教材、キャリア教育に関する資料、学校行事、講演のための事前学習教材等
- ・図書館利用教育、図書委員会活動の支援、タブレット端末を利用した授業推進のための環境整備

##### 2. 中学・高校教員の組織力アップのためのプログラムの充実

- ・教職員全員での大阪女学院の建学の精神の確認、共有
- ・学校の運営の引き継ぎのためのスタッフ養成プログラム等の企画
- ・教職員が孤立せず、互いに信頼し、支え合うことのできる組織づくり

##### 3. 中学・高校教務のシステムの統一と展望

- ・教務、事務関係のサーバーの交換等、設備投資の研究、計画

#### Ⅳ. 生徒支援

##### 1. 生徒の自己実現を促す進路指導

- ・中学校でのキャリアガイダンスの充実、さまざまな職業についての関心と社会参加に対する高い意識を育てるための取り組み
- ・高校3年生の3学期、入試直前まで寄り添う受験のための学習指導
- ・大阪女学院短大・大学の魅力を正しく伝え、併設の特徴を活かした進学指導
- ・協定校推薦枠の拡大ー関西学院大学への協定校推薦人数増員に向けて、関西学院大学への働きかけ

#### Ⅴ. 危機管理

##### 1. いじめ、キャンパスハラスメントの防止と対応

- ・キャンパスハラスメント防止への積極的な取り組み

##### 2. 地震をはじめ防災への取り組み

- ・生徒の安全、避難のための取り組みおよび、地域の避難所としての取り組み

自己評価アンケートの結果と分析		
○生徒 [2014年12月実施] 【分析】	○保護者 [2014年12月実施]	○教職員 [2014年 2月実施]
生徒	保護者	教職員
<p><b>宗教教育・解放（人権）教育について</b></p> <p>宗教教育については例年どおり、中2で停滞または落ち込みが見えるが、学年が上がるにつれて本校の目指す教育目標を理解し、考え方を身につけていくことがわかる。</p> <p>解放(人権)教育についても、宗教教育とほぼ同じ経過をたどりつつ、各々の個性や人格を尊重し合い、解放プログラムに掲げる社会的テーマにも関心、理解を深めている。</p> <p><b>生活指導について</b></p> <p>生活指導については、今年度は中2での落ち込みはほとんどなく、「本当の自由」「社会のルールや公共のマナー」「基本的な生活習慣」については共通理解を得、ともに目標に向かうことができている。それに比べて、「あいさつ」への取り組みが少し弱い。</p> <p><b>学校行事について</b></p> <p>学校行事については、生徒会主催の行事も、学年ごとの行事も、6学年ともほぼ90%以上の生徒が、生徒同士のつながりを深めるために有意義であると答えている。卒業を控えた高3生徒の肯定的回答は96%を超えており、6年間の生徒の行事への満足度は大変高いことがわかる。これは、生徒が主体的に行事を運営し、かつ参加していることによる成果である。</p> <p><b>学校生活について</b></p> <p>学校生活については、「楽しく充実している」「クラブ活動が活発である」という項目については、どの学年もほぼ90%以上の肯定的回答が得られた。一方、生徒からの相談に対する教員の姿勢、学校生活への教員の指導の姿勢については50%～80%台まで学年によってばらつきのある結果となった。どちらの項目についても、学年が上がるにつれて、肯定的回答の率が上がることから、生徒と教員とのコミュニケーションや信頼が、中学から高校にかけて少しずつ築かれていくと考えることができる。また、昨今の中学生の相談相手が低学年ほど、親や友達であることが多い現状も原因と考えられる。</p> <p><b>学習について</b></p> <p>学習活動についての質問から見えてくることは、まず、カリキュラムへの回答が、高3生の肯定的回答が最も低かったのは、新指導要領実施後の大学入試の改革は年ごとにめまぐるしく、高3生の中に科目選択等に不安を抱えた者がいたことが予想される。が、3年に一度のこの質問については、3年前の回答をどの学年も上回っている。今年度初めて質問に加えてみた各種補習や、有志参加の講座についての回答については、補習や講座の当該学年については、ある程度の評価を得ていることがわかる。また、自分自身の学習姿勢に関わる質問については、集中力、自己管理能力ともに学年が上がるごとに肯定的回答は伸びる傾向にあるといえる。</p> <p><b>進路指導について</b></p> <p>進路指導については、中学生は、遠い将来を見据えて高校のコースを選ぶというより、まずコース選択を考え、それから先の進路については、学年が上がるごとに考えを深めていくということが数字に表れている。</p>	<p><b>本校に入学したことについて、全学年の93%の保護者が、肯定的回答をくださった。学校の教育方針も85%以上の保護者に理解されているという結果が出た。</b></p> <p>本校のキリスト教教育が、生徒の日々の学校生活や行事、PTA(本校ではホール会と呼ぶ)活動を通して保護者によく理解されていることは本校の教育の大きな強みである。キリスト教教育を土台とした本校の教育方針が、生徒の人格形成、生涯にわたる学びの礎となっていることが認知されているということは、生徒を教育する上で最も重要な点で、教職員と保護者が一致して、生徒の人格教育にあたっているということであり、これが本校の教育の最も大きな特徴である。</p> <p><b>ニーズにあった教育活動、また教職員の熱意については、肯定的な回答が80%を超えるものの、学年によるばらつき少しある。</b></p> <p>教育活動、学校行事、生徒会活動、クラブ活動については、肯定的な回答が80%を超えた。特に学校行事、生徒会活動、クラブ活動についての満足度は高い。</p> <p><b>教育環境、施設設備の整備についても91%の保護者から肯定的回答をいただいた。</b></p> <p>庭の草花、木々は、創立130年来大切にしてきた重要な教育環境であるが、ここ数年は、マルチメディア3教室(コンピュータ教室)の整備、すべてのHRに順次設置している電子黒板、要支援生徒のためのサポートルームの整備、緊急地震速報装置の整備、図書館棟の耐震、調理、被服実習室の改装等授業のための環境整備を進めてきた。これらの環境が教職員の日々の工夫により、授業に実質的に生かされ、成果が上がっていることを実感する。</p> <p><b>家庭への連絡、情報提供については、ここまでの質問に比べて肯定的回答は77%とやや低くなる。</b></p> <p>本校での保護者の連絡は、基本的には生徒に持ち帰らせるプリント類である。行事や、クラブ等の情報提供としては、学年、学級通信、H.P.のクローズドサイト等がある。緊急時はNTTコミュニケーションズのFairCastを利用している。</p> <p>この結果から考えられることの一つは、保護者宛のプリント類が、生徒から適切に手渡されていない可能性があること。二つ目は、思春期の子どもたちの学校生活に対して、保護者としては心配が多く、学校からの細かな情報提供を求めておられるということである。おそらく、行事や予定等の連絡はもちろんであるが、我が子の学習状況やクラス、クラブ活動での様子などを知って、安心を得たいという思いなのではないかと想像する。学校での様子を全く話さなくなる子どももいる中で、保護者の気持ちとして共感できる。</p> <p>学校としては、配布したプリント類は、クローズドサイトにその都度アップすることとし、また、必要な情報はH.P.や学年、学級通信を利用して提供していきたい。保護者にも、できる限り子どもとの対話を心がけていた</p>	<p>教職員への自己評価アンケートは、下記に示す評価指標の内容に基づいて行った。集計から、教職員が現状に満足せず、まだまだ高いところを目指している途上であることがわかる。</p> <p><b>I 建学の精神と教育理念の実践</b></p> <p><b>I-1. 時代の求めに応じた宗教教育の推進</b></p> <p><b>I-2. 建学の精神の再認識と再構築</b></p> <p>他の項目では見られないような高い値が出ている。キリスト教教育による人格形成、生涯学習の土台の形成について、肯定的な回答は94%を超える。教職員は、この項目について、かなりはっきりとした一致を見て教育にあたっていることがわかる。</p> <p><b>II 教育の内容と学習支援の充実</b></p> <p><b>II-1. 学力向上</b></p> <p>2012年度2013年度の新指導要領の実施に伴い、カリキュラムの変更を手がけた。続いて2年をかけて各教科のシラバスの見直しを行ってきたが、大学入試の形はめまぐるしく変化し、今はまた2020年に向けて大きな変革の時期を迎えている。中高6年間を見通して、実のあるしかも大学入試に適切に対応できる授業計画を作り上げていくことは簡単なことではない。「目標を明確にできたと思う」と答えた教員が19%にとどまっており、約60%の教員が「やや思う」と回答しているのは、自分としては、明確に目標を定めて授業を行っているが、それが生徒のニーズや社会の現状に適合しているかどうかの判断に迷っているというところではないかと推察される。</p> <p><b>II-2. 自己管理</b></p> <p>昨今の生徒の現状から、学力向上を目指す為の基本的な指導として、スケジュール等の自己管理能力の養成が必要であると考え、中学生からこの課題のための指導に力を入れてきた。自主学習時間は6年目、OJダイアリーは2年目となった。アンケート結果からは、まだまだ十分な成果が上がっているとはいえないが、何も仕掛けがなかった時と比べると、少しずつ成果は上がっているといえる。</p> <p><b>II-3. 授業・補習内容の充実</b></p> <p>高校生の希望者補習(水曜・土曜講座)、自習用講座(BB講座)についても、少しずつ効果が上がっているという結果が出ている。</p> <p>ただし、分割授業、習熟度別授業については、どちらも肯定的な回答をしているのが約50%の教職員であることが気になるところである。学校としては、習熟度別クラスについては、生徒の学力に合わせた授業展開により成果を上げること、また少人数で行うことにより、教員の指導を行うことができるのが大きなメリットであると考えてきた。今後は更なる工夫と変革が必要である。</p> <p>一方で、電子黒板や、MM(マルチメディア)教室の利用については、さまざまな教科の授業に活用されて、効果を上げている。</p> <p><b>II-4. 新指導要領、大学入試改革への対応</b></p> <p>教頭、進路部長を中心に今後の大学入試を見据え、カリキュラムの改訂を行い、必要な補習を組み、タイムリーな情報を生徒、保護者、教職員に発信していくことができると教職員は感じている。</p> <p><b>II-5. 英語科の改革</b></p> <p>英語科改革については、教職員全体への目標、課題の共有はまだ不十分であるのが現実である。国の施策もグローバルな人材育成に大きく舵をきる中で、教職員が一致して改革に取り組み、大阪女学院の歴史と特質を生かした英語教育・国際理解教育を、更に推し進めて行くために力を結集したい。</p> <p><b>II-6. 生徒の生活全般に対する指導</b></p> <p>SNSの利用、服装、身だしなみ、挨拶、公共のマナーの指導について、どれも取り組みが不足しているという認識である。どの項目についても、生活指導委員会を中心に地道に取り組んできたが、更なる努力を行い成果を上げていきたい。</p> <p><b>II-7. 留学の充実</b></p> <p>留学については、留学生の受け入れ、本校から送り出す</p>

**保健室について**

保健室について、これも3年に一度の質問であるが、この数値については、どの学年も3年前の数値をかなり大きく上回っている。これは、不登校傾向や深刻な不定愁訴の生徒の一時避難の場所として、サポートルームを設置し、支援教育が学校の制度として機能し始めたことと関係があると思われる。保健室とサポートルームの機能が分けられ、養護教諭、サポートルーム指導員が各々の生徒の訴えに対して、細やかに対応している結果である。

**施設設備・教育環境について**

施設設備について、これも3年に一度の質問であるが、キャンパスの緑、教育施設、安全整備、どれについてもどの学年も、3年前よりも少しずつ肯定的回答率が上がっている。これは、庭の木々の手入れをたゆみなく行っている営繕の職員の姿を生徒たちが如実に見ていることに加えて、日常の中で緑の大切さが以前にも増して実感されるという社会状況を反映していると思われる。また、教育施設、設備に関しては、マルチメディア教室の活用、各教室への電子黒板の導入等が授業に与えている効果が大きいことを示している。安全整備面では、緊急地震速報受信装置の設置、その装置を利用した避難訓練等について生徒が重要性を認識した結果、数値が伸びていると思われる。

**国際教育について**

国際教育について、留学生との交流についてはアンケートを実施した高校全学年で85%を超える肯定的回答を得、留学生を受け入れる当該学年である高2では90%を超えている。また、高1で行う海外研修の意義については、90%を超える肯定的回答を得ている。学年の約1/3が参加するこの研修について、参加しなかった生徒も、友人の体験や話を通じて意義深いという実感を得ていることがわかる。

**授業評価について**

授業評価については、どの項目についての回答も、昨年度とほぼ同様の結果であった。A.教員の授業内容への年間計画、B.授業のわかりやすさ、C.クラスに一体感を生み出す指導、D.興味、関心を引き出す工夫についての肯定的回答は、中学、高校の平均で68～85%までの開きがあり、すべてについて高校生の方が少しずつ高い結果が出た。Eの生徒自身の授業中の集中力についても、中学生と高校生では、10ポイントの差が開き、中学生と高校生の授業に対するモチベーションは、高校生の方が高いといえる。しかし、数値が、中学生60%、高校生70%であるところから、この集中力の絶対値を上げていく工夫こそが大切であると考えられる。

きつつ、心配なことについては、学校に連絡をいただき、連携して見守るように今後も努めていきたい。

**PTA(へール会)活動については、保護者の91%から肯定的回答を得た。**

本校はPTAを創立者の名前をとってへール会と呼んでいる。へール会の役員(本部委員・運営委員・学級委員)は、担任をはじめ教職員と協力して、互いの親睦をはかりつつ、学校のあらゆる活動に協力してくださっている。中高6学年の保護者有志、教員約200名が集う年2回(夏・クリスマス)の親睦会、私学助成のための署名活動は役員全員にご協力いただいている行事である。また、発足して5年になるお父様の会ウキルミナ・メンズクラブ(WMC)の会員も少しずつ増え、へール会への父親の関心も高まり、行事への参加者も年々増えている。

留学生の学びの成果ともに充実しており、留学を希望する生徒へのサポート体制も概ね整っているという教職員の認識である。この分野については、今後更にニーズが多様化し、卒業後の進路にも直結していくことから、情報収集と研究の継続が必要である。

**Ⅱ-8. 教職員の人権意識の向上・要支援生徒へのサポート**

学校、学年の人権プログラム、支援教育(長期欠席、不登校傾向等の生徒への指導)体制について、充実していると感じている教職員が多い。

**Ⅲ教育の実施体制の改善**

**Ⅲ-1. 募集・広報活動**

教職員は今年の募集・広報について、適切であり、自らも積極的に関わることができたと考えている。今年度から、すべての教員が居住地周辺を中心に中学校を訪問、学校を紹介行ったことが高校の受験生増に繋がった。また、オープンキャンパス、入試説明会にも全体制で臨むことができた。

**Ⅲ-2. 図書館活動**

教職員の図書館の活用については、まだまだ研究の余地がある。

**Ⅲ-3. 教職員の研修プログラム**

本校新任教員対象研修チームOJ、キリスト教学校教育同盟の中堅者研修、カウンセリング研究会のプログラムについては、役立っていると感じている教職員は半数をやや下回る結果となった。これは、プログラムそのものの課題もさることながら、多忙を極める現状の中で、実際にこれらの研修会に参加することもままならない実情も大きく影響した結果であると考えられる。学内の取り組み、また本校を会場にしたキリスト教学校教育同盟のプログラムへの参加等をこれからも呼びかけ、教員の学ぶ機会を保障するように考えていきたい。

**Ⅳ生徒支援**

**Ⅳ-1. 進路指導の取り組み**

ここ数年は、中学1～3年の将来へのモチベーションアップのための進路プログラム、高校3年生の大学入試直前のプログラムに力点をおいてきた。これについて、教職員はよい方向に向かっていると感じている。

大阪女学院大学・短大との連携については、以前よりはかなり進んだが、まだまだこれからの取り組みが期待される。

**Ⅴ学校危機管理**

**Ⅴ-1. 危機管理の強化について**

3年前に起きた大阪府立高校での体罰事象を契機に生徒(保護者)・教職員からのハラスメント(体罰を含む)についてのアンケートを実施し、上がってきた事象について対応を続けていることもあり、キャンパスハラスメント防止のための取り組みについては、6割以上の教員が肯定的回答を寄せている。ハラスメント委員会の機能については、数値がやや下がる。アンケートの対応にあたる相談委員(教職員の互選)の立場の難しさが推察される。生徒と教職員自身の心身の健康、命を守るための重要な取り組みとして位置づけていきたい。

地震をはじめ防災への取り組みは少しずつ進めているが、避難時の備蓄、地域との連携等まだまだ多くの課題があり、計画途上である。たゆまず進めていきたい。

**3. 本年度の取り組み内容および自己評価**

	今年度の重点目標	具体的な取り組み計画・内容	評価指標 *通し番号は教職員アンケートの番号	自己評価
I. 建学の精神と教育理念の実践	<p>1. 時代の求めに応じた宗教教育の推進</p> <p>2. 建学の精神の再認識と再構築</p>	<p>時代に追従せず、かつ時代に求められている宗教教育、「愛と奉仕」の実践を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>被災者支援の会による東北ボランティア、東北支援の継続</li> <li>日々の礼拝、宗教行事を通じて、物事の本質を見抜き、自分らしく生き抜くための精神の土台を育てる。</li> <li>社会的な男女の役割意識にとらわれることなく、各々の特性を伸ばし、生涯学ぶ力を育てる。</li> </ul>	<p>1. 礼拝、宗教行事等、キリスト教教育全般を通して「愛と奉仕」の精神をもって、互いの個性を尊重し合い、自分自身の生き方を考えるよう導いているか。</p>	<p>本校の精神の土台であるキリスト教教育については、130周年の伝統の中で生徒、保護者の理解と協力を得て、教職員の明確な意識のもとに、「<u>生き抜く力</u>」「<u>愛と奉仕の精神</u>」を養うという<u>人格教育として成果を上げている</u>と自負する。</p>

<p>1. 学力向上</p> <p>2. 自己管理</p> <p>3. 授業・補習内容の充実</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>より充実したシラバスの作成ー各教科、学年、科目における目標設定、教員の授業力 UP</li> <li>中学入学時から高校卒業時まで偏差値 10 point UP</li> <li>自学自習できる主体性と学力を身につけるための自己管理の指導に取り組む。(高校)</li> <li>OJ ダイアリーの改善、利用継続による目標、スケジュールの自己管理能力の養成 (中学)</li> <li>BB講座、土曜講座、水曜講座の内容の改善 (高校)</li> <li>2週間時間割によって授業時間を確保する。</li> <li>分割授業、習熟度別クラス編成の授業形態について、ボトムアップに加えて、発展的な内容を深めるためのプログラムを検討する。</li> <li>生徒の発達段階に応じたデジタル機器の有効性について研究する。</li> </ul>	<p>2. 中高6年間の指導目標を明確にして指導できたか。</p> <p>3. 1年間で学力推移調査、またはステージテスト等の生徒の偏差値は上昇したか。</p> <p>4. 生徒の自学自習、自己管理の力は向上したか。(高校)</p> <p>5. 自主学習時間、OJダイリーの利用の継続により、生徒の自己管理の力は向上したか。(中学)</p> <p>6. BB講座、土曜講座、水曜講座によって、生徒の学習が充実したものになったか。</p> <p>7. 2週間時間割により、授業時間が確保されたか。</p> <p>8. 分割授業、習熟度別授業による成果はあったか。</p> <p>9. 授業において、電子黒板、プロジェクター、MM 教室等の利用が進んだか。</p>	<p>「自由」に基づく自己管理の力を育てるため、中学生にはスケジュール管理のための「OJ ダイアリー」「自主学習時間」の取り組みを続けている。また、高校生にも有志参加の補習、講座を提供してきた。<u>一定の成果は見られるものの、生徒全体への成果が上がるまでには、まだまだ工夫が必要である。</u>自己管理力は、「自由」を掲げる本校にとっては特に重要な力である。忍耐強く生徒とともに継続して取り組んでいきたい。</p> <p>学習について、環境、施設整備については、重要課題として取り組みを続けている。<u>電子黒板、MM 教室については有効利用が進んでいるが、ここ数年取り組んでいる中学校の分割授業、習熟度授業には、改善の課題がある。</u>各教科を中心に、学年、学力検討委員会等様々な単位で更なる検討を重ね、現在の生徒に合った授業を作り、成果を上げていきたい。</p>
<p>4. 新指導要領・大学入試改革への対応</p> <p>5. 英語科の改革</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>国公立大学入試改革、センター英語の改革への対応</li> <li>時代の求める英語科への改革をすすめる。資格修得等の成果について数値を掲げた目標の可視化</li> </ul>	<p>10. 今後の国公立入試についての進路情報提供は適切か。</p> <p>11. 英語科改革における今後の目標、課題の共有はできたか。</p> <p>12. また本年度について成果はあったか。</p>	<p>これまでも大きな改革がなされてきた大学入試であるが、今後は更にグローバル化に向けて改革が続いていく。スピードが要求される中、教職員のコンセンサスを得ることに十分な時間がとれず困難も多いが、伝統的に英語教育、人権教育に力を入れてきた本校が、<u>トータルな学力、人間力の獲得を「英語科の改革」を通して全校生徒に実践していくとよい機会である。英語外部試験への参加、エンパワーメントプログラムの実施、学内での英語プログラムの充実、国際特別入試(中学)等、さらに必要な施策を打ち出して進めていきたい。</u></p>
<p>6. 生徒の生活全般に対する指導</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SNS の利用についてのマナーやルール、トラブルに巻き込まれないための知識を得て、有効に利用できる力を身につけさせる。</li> <li>身だしなみの指導(スカート丈等)の指導を強化する。</li> </ul>	<p>13. SNS の利用について、生徒に必要な指導ができたか。</p> <p>14. SNS の利用について、保護者に理解と協力が得られたか。</p> <p>15. 服装身だしなみの指導は適切だと思うか。</p> <p>16. あいさつについての指導は適切だと思うか。</p> <p>17. 公共のマナーについての指導は適切だと思うか。</p>	<p>SNS の利用指導は、喫緊の対応を迫られている課題である。<u>昨年度より、積極的に生徒、保護者、教職員対象に学習会を行ってきたが、時代のスピードに追いついていないのが現状である。</u>有効利用の観点に加えて、個人情報を守り、トラブルに巻き込まれないように、また人間関係に支障を来さないためにも、学ぶべきことは多くある。有効に利用できるよう、知識とマナーを<u>学ぶ機会を設けていきたい。</u></p> <p>身だしなみ、挨拶、公共のマナーについての指導を地道に行ってきたが、さらに継続、強化する。</p>
<p>7. 留学の充実</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>姉妹校・姉妹提携校との円滑な交流の継続。姉妹校 Ravenswood(オーストラリア)との短期交換留学 姉妹提携校 Longfield Davidson(カナダ、オタワ)との交換留学</li> <li>YFU・AFS・EF等、留学説明会等による留学希望者への支援の充実</li> </ul>	<p>18. 留学生の受け入れにより、充実した交流ができたか。</p> <p>19. 本校から留学した生徒は、留学の成果を上げることができたか。</p> <p>20. 留学を希望する生徒に対して、十分なサポートができていくか。</p>	<p>留学生の受け入れについても YFU の年間留学生 1 名他、中期、短期数名の受け入れにより、<u>よい交流が実現している。</u></p> <p><u>留学については、高校1年生から短期、中期、長期、さまざまなプログラムが設けられており、生徒、保護者からも評価を得ている。</u>時代のニーズが高まる中で、より実質的な内容をともなったものにするべく努力を行う。</p> <p>近年は、<u>外国の大学への進学が少しずつ増えており、この春はハンガリーの大学の医学部への進学者が出るなど、まさにグローバル化が進む傾向にある。</u></p>
<p>8. 教職員の 人権意識の向上・ 要支援生徒への サポート</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>解放(人権)プログラムの充実</li> <li>健康・学習・生活各方面での要支援生徒への学校を挙げてのサポート体制の充実</li> </ul>	<p>21. 学年、学校の人権教育プログラムは、時代の動きに対応し、充実しているか。</p> <p>22. 長期欠席、不登校傾向等の要支援生徒への支援は適切であったか。</p>	<p><u>解放(人権)教育のプログラムについては、高校3年生でキリスト教教育の「愛と奉仕」の実践とともに一つとなって生徒の心の成長、生きる力となって身を結ぶ。</u></p> <p>5年前にスタートした支援教育委員会が定着してきた。教頭がコーディネーターとなり、担任、学年主任とともに、スクールカウンセラー、養護</p>

				教諭、サポートルーム指導員、生活指導部長、教務部長、校長が <u>チームで支援プログラムを検討する体制が機能している。</u>
Ⅲ. 教育の実施体制の改善	1. 生徒の安定的な人数確保のための取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教職員全員で、本校の広報活動、募集に取り組む。</li> <li>・普段の取り組みをわかりやすく、あらゆる機会を捉えて紹介するとともに、SNSを有効に用いてアピールしていく。</li> </ul>	<p>23. 本校の広報活動、募集対策は適切か。</p> <p>24. 募集・広報に積極的に関わることができたか。</p>	<p>中学受験生の減少、少子化の傾向等、厳しい現実だが、本校にしかできない教育を実践し続けていくために、<u>教職員全員で募集・広報にもあたっていくことができた。</u>今年、専任教員全員が本校入学生の出身中学校の訪問を行い、生徒の現状報告と学校紹介を行った。教員自身にも外から学校を見るよい機会となり、また多くの中学校に学校をアピールする機会となった。オープンキャンパス、入試説明会にも教職員全員で望み、受験生である小・中学生と対応する中で、本校の教職員と生徒の親しい関係を受験生に自然な形で伝える機会になったと考えられる。</p>
	2. 図書館機能の充実と教員との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリア教育に関する資料の充実</li> <li>・タブレット端末を利用した授業推進のための環境整備</li> </ul>	25. 授業、進路指導において、図書館を有効に利用できたか。	<p>短大・大学と共同で使っており、蔵書も充実した図書館だが、中高の教職員、生徒ともに、<u>頻りに利用している者とほとんど利用しない者との差が大きい。</u>インターネットに頼らず、正確で体系立った資料として図書館の<u>有効な利用を呼びかけていきたい。</u></p>
	3. 教員の組織力アップのためのプログラムの充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世代交代のために学校運営を引き継ぐとともに、新任教員が孤立せず、チームとして支え合える 集団になるための校内プログラムの実施、校外研修への参加</li> <li>・互いの課題を話し合える教職員集団への成長</li> </ul>	26. チーム OJ、キリスト教教育同盟主催の中堅者研修、カウンセリング研究会のプログラム等は、学校運営、教職員の集団づくりに役立っているか。	<p>進路、教科指導等の研修に比べて、生活指導、カウンセリング、クラス経営等の研修への参加が少ない傾向にある。教員は多忙を極め、より成果が期待されるものから学ばざるをえず、必要は感じているが、上記の研修への参加まで手が回らないのが実情であると推察される。<u>教員が孤立、疲弊してしまわないよう、研修、親睦を通じて我々教職員のチーム力を高めたい。</u></p>
Ⅳ. 生徒支援	1. 自己実現を促す進路指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校でのキャリアガイダンスの充実 同窓生による職業紹介（約 20 職種）プログラムの実施</li> <li>・高3、3学期、入試直前まで寄り添う受験指導の充実</li> <li>・大阪女学院短大・大学との連携 留学・難関私立大、国公立への編入等、進路選択肢の 拡大。</li> </ul>	<p>27. 中学で新しく取り入れられた進路プログラムは、生徒の意識、意欲を高めるために役立っているか。</p> <p>28. 3学期の高校3年生対象の入試 対策、センター、私大、後期対策のプログラムは、入試直前の生徒のサポートとして、成果を上げているか。</p> <p>29. 大阪女学院短大・大学との連携は進んでいるか。</p>	<p>中学での<u>具体的な進路指導の機会</u>は、<u>生徒により影響を与えている。</u>ただ、受け身のプログラムであるため、身だしなみや挨拶、コミュニケーションのため自分自身から話をするという<u>主体的な体験が今後は必要である。</u></p> <p><u>国公立入試センター、前期、後期入試をサポートする高3、3学期のプログラムは、対象の生徒を支え、成果を上げるために有効である。</u>2014年度の後期入試の合格者は大幅増となった。</p> <p>短大・大学との連携は、徐々に進んで来たが、<u>短大・大学の特色あるカリキュラム、少人数制の成果、奨学金制度、学内推薦の利点、さらには国公立、難関私立への編入実績や就職率近畿 NO1の実績などわかりやすく伝える必要がある。</u></p>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・いじめ、キャンパスハラスメント(体罰を含む)事象の発生を未然に防ぐため、学校全体で積極的に取り組む。</li> <li>・キャンパスハラスメント規程、委員会の存在を生徒、保護者、教職員に広く知らせて、いつでも相談できる体制づくりに努める。キャンパスハラスメントに関する調査を継続して行う。</li> <li>・大地震を想定した危機回避訓練、事後の生徒、教職員の緊急避難生活を想定して準備を進める。</li> </ul>	<p>30. キャンパスハラスメント事象の防止に積極的に取り組んでいるか。</p> <p>31. キャンパスハラスメント委員会及び調査は、有効に機能しているか。</p> <p>32. 学校の地震をはじめとする防災への備えは進んでいるか。</p>	<p>府立高校の部活動中の体罰事象等を契機に教員および生徒を指導する立場にあるクラブコーチ等から生徒へのハラスメント(体罰を含む)を防止することを第一として、生徒(家に持ち帰って保護者とともに記入してもらう形式)、教職員に、上記のような事象についてのアンケートを実施して3年目となった。<u>教員、コーチ等指導者は、今まで以上に緊張感をもって、意識的な判断の下に生徒の指導にあたることができています。</u>しかしこのアンケートは、生徒の立場から一方的に書かれるものであるため、<u>客観的な事実確認が難しいという難点がある。</u>継続には、「<u>生徒の生命を守る</u>」という目的を教職員全員で常に確認し続けていく必要がある。</p> <p>地震を中心とした防災への備え、避難訓練等、<u>すべての取り組みが始まったばかりである。</u>非常食、水の備蓄も行っているが、不足している。<u>今後は地域との協力を含めて計画的に進めていく。</u></p>
Ⅴ. 学校危機管理	1. 学校危機管理の強化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いじめ、キャンパスハラスメント(体罰を含む)事象の発生を未然に防ぐため、学校全体で積極的に取り組む。</li> <li>・キャンパスハラスメント規程、委員会の存在を生徒、保護者、教職員に広く知らせて、いつでも相談できる体制づくりに努める。キャンパスハラスメントに関する調査を継続して行う。</li> <li>・大地震を想定した危機回避訓練、事後の生徒、教職員の緊急避難生活を想定して準備を進める。</li> </ul>	<p>30. キャンパスハラスメント事象の防止に積極的に取り組んでいるか。</p> <p>31. キャンパスハラスメント委員会及び調査は、有効に機能しているか。</p> <p>32. 学校の地震をはじめとする防災への備えは進んでいるか。</p>	<p>府立高校の部活動中の体罰事象等を契機に教員および生徒を指導する立場にあるクラブコーチ等から生徒へのハラスメント(体罰を含む)を防止することを第一として、生徒(家に持ち帰って保護者とともに記入してもらう形式)、教職員に、上記のような事象についてのアンケートを実施して3年目となった。<u>教員、コーチ等指導者は、今まで以上に緊張感をもって、意識的な判断の下に生徒の指導にあたることができています。</u>しかしこのアンケートは、生徒の立場から一方的に書かれるものであるため、<u>客観的な事実確認が難しいという難点がある。</u>継続には、「<u>生徒の生命を守る</u>」という目的を教職員全員で常に確認し続けていく必要がある。</p> <p>地震を中心とした防災への備え、避難訓練等、<u>すべての取り組みが始まったばかりである。</u>非常食、水の備蓄も行っているが、不足している。<u>今後は地域との協力を含めて計画的に進めていく。</u></p>

## 2015年度 関係者評価のまとめ

学校関係者評価委員会 2015年9月10日(木)16:00～17:40

### 【2014年度学校自己評価の形式・内容についての説明】

項目1. ミッションステートメント、育むべき生徒像については、既に共有している学院全体の理念である。

項目2. 中期計画については、2014～2019の学院の中期計画及び2014年度の事業計画を簡潔にまとめた。

項目3. 本年度の取り組み内容および自己評価については、2014年度事業計画の具体的な取り組みを指標として、自己評価を行った。

また、委員会メンバーには最近の学校が置かれている現状ーグローバル化に対応するための大学入試改革を見据えて、中高もかなりのスピードで改革を求められているということをお話しし、2020年の大学入試のあり方等についても説明した。

生徒アンケートより 各項目の生徒の傾向は概ね例年通りであるが、「挨拶の取り組みが弱い」ということについて意見交換がなされた。「挨拶ができていない生徒や、教師に対して敬語を使っていない、失礼な振る舞いがある生徒には、しっかりと教えて正してもらいたい」という意見が出た。教員と生徒の間が近く、親しいことはとてもよいことだが、ソーシャルスキルの問題でもあるので、生徒の挨拶や言葉遣いについては意識的に、指導を強化してもらいたいとのことであった。

SNSの生徒への影響について質問があり、かなりの時間を費やしてこの問題について話し合った。学校では生徒、保護者各々を対象に、セキュリティーや使い方、マナー、個人情報への配慮、どんなトラブルが起きているか、またトラブルはどのようにしたら回避できるかについて、学年ごとに発達年齢に合わせた講演会を行っているが、実際に問題が起きてみないと自分のこととして考えることができない場合も多く、特に中学生はまだ精神的にも社会的にも未熟なため、自分をコントロールして上手に利用するのが難しい。保護者の見守りと管理が不可欠である。本校は保護者への連絡は、現在紙ベースの文書である。データで配信する学校も出てきているが、しばらくはこの形で行きたいと考えている。SNSの普及は、生徒の依存と隣り合わせであり、現実の世界での人間関係の構築を妨げる場面も多く、今後の生活指導、ソーシャルスキル教育、人格教育のあり方にも、新しいアプローチが必要になってきているというところでメンバーの意見の一致を見た。

危機管理の中の災害時、殊に地震の時の対応について、具体的な質問があった。9月4日に行われた地震に備えての「大阪880万人訓練」に合わせて、本校でも中高全体で待避行動の訓練を行った。しかし、残念ながら訓練への意識は高いとは言えず、中学生よりも高校生の待避行動の遅れが目立った。訓練のあり方についてはまだまだ工夫が必要である。保護者の立場の委員会メンバーからは、通学途上での地震についての心配の声が聞かれた。私学の場合は、途上での災害対応については各家庭にお任せせざるをえないのが現状である。また、今後の課題は生徒たちが学校待機になった場合の備蓄、毛布、自家発電等の準備を進めていくことである。

メンバーからの意見を総合すると、教育内容やその発展については本校の取り組みや姿勢、また現状について信頼と賛同をいただいていると感じた。一方で、社会におきている問題に否が応でも晒される生徒たちを、危険から守りつつ、いかにたくましく、主体的に判断、自己管理できる人として育て、よい人生を生きていけるように教育していくかについて、学校教育に期待されているところが大きいことをひしひしと感じた。家庭での教育力、管理力が弱まる傾向にある現代であればこそ、保護者、同窓生、地域の方々とともに、子どもたちを守り、ともに成長していきたいと考える。また自然の災害への意識についても、自分の身は自分で守る。自分のできることで他の人の役に立てるように動けるようになることも、自立に向けての大切な教育であることを改めて考える機会となった。本校は災害時は体育館が地域の方々の避難場所となっている。そのようなことについても具体的に生徒と教職員がしっかり認識し、準備をすすめていく必要を感じた。